

日本人のための日本語マニュアル

－言葉の仕組みを学び、外国語との対照を通じて日本語スキルを磨く－

Japanese writing manual for the Japanese

東京工科大学名誉教授／一般財団法人日本特許情報機構 特許情報研究所顧問 **横井 俊夫**

PROFILE 1966年に電気試験所（現在：産業技術総合研究所）。1982年より第五世代コンピュータプロジェクトを推進。1987年より電子化辞書プロジェクトを推進、運営。1995年よりフィリピン国ODAプロジェクトを推進、指導。1997年より東京工科大学。2008年よりJapio 特許情報研究所顧問。東京工科大学名誉教授、工学博士。

✉ yokoi@stf.teu.ac.jp

慶應義塾大学名誉教授／一般財団法人SFCフォーラム理事 **石崎 俊**

PROFILE 1972年に電子技術総合研究所（現在：産業技術総合研究所）。1992年から慶應義塾大学環境情報学部教授。言語処理学会会長、日本認知科学会会長、日本工業標準調査会情報技術専門委員会委員長などを歴任。慶應義塾大学名誉教授、工学博士。

✉ ishizaki@sfc.keio.ac.jp

東京外国語大学教授 **佐野 洋**

PROFILE 東京外国語大学総合国際学研究院教授（情報工学）。日本語研究や英語教材に関して著作多数。

✉ sano@tufs.ac.jp

大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所准教授／一橋大学連携教授 **石黒 圭**

PROFILE 1999年に一橋大学留学生センター専任講師。2013年から一橋大学国際教育センター・言語社会研究科教授。2015年から国立国語研究所准教授。日本語研究、日本語文章技術に関する著書多数。博士（文学）。

✉ ishigurokei@ninjal.ac.jp

翻訳家／語学教材作家 **猪野 真理枝**

PROFILE 翻訳家、語学教材作家。2015年より東京外国語大学オープンアカデミー講師。英語教育・教材に関する著書多数。

一橋大学国際教育センター非常勤講師 **烏日哲（ウリジャ）**

PROFILE 2012年から一橋大学国際教育センター非常勤講師。中国人日本語学習者のナラティブ分析の研究に従事。博士（学術）。

✉ wurijajp@yahoo.co.jp

現在、制作中の「日本人のための日本語マニュアル」を、執筆原稿の第1章を抜粋・要約する形で紹介する。なお、執筆原稿全体の抜粋・要約は、以下の産業日本語研究会のホームページに掲載したので、興味を持たれた方はこちらをご覧ください。

〔日本人のための日本語マニュアル（日本語マニュアルの会）：2015年8月版〕

<http://www.tech-jpn.jp/wp-content/uploads/2015/03/pr-05-1.pdf>

本マニュアルは、次の3種の著作物として、世に出し、広く普及を図っていく予定である。

- (1) 本格版：本稿で紹介する内容を盛り込んだ本格的なビジネス書である。
- (2) ビギナーズ版：本格版の1章、2章、3章までをかみ砕き分かり易くし、企業の新人教育用にも使ってもらえる入門書である。
- (3) ライティングルール版：

本格版の3章、4章、5章のルール部分をWeb上で公開する。本マニュアルの応用や改良・拡張に向け多くの方々に関心を持っていただくためである。

『日本人のための日本語マニュアル

- 言葉の仕組みを学び、外国語との対照を通じて日本語スキルを磨く -』

日本語マニュアルの会

目次

はじめに

1章 文書・文章ライティングのモデルプロセスを学ぶ

2章 情報を表わし伝える言葉の仕組みを学ぶ - 日本語と外国語とを照らし合わせる -

3章 「表す日本語」で書き、「伝える日本語」へと言い換える

4章 「訳せる日本語」へ言い換える

5章 コンピュータの支援機能を活用する - 文章校正ソフトと機械翻訳ソフト

おわりに

はじめに

日本人のための日本語マニュアルとは、日本人を利用者とする日本語という言語装置の取り扱い説明書です。ただし、言語装置は、ビジネス活動や産業活動で使われるものに限りません。言語装置が提供してくれるのは、情報を表現し、情報を伝え、他言語に訳すという機能です。本マニュアルが目指すところは、言語装置の取り扱い方を解き明かし、その機能を出るだけ効果的に使えるようになるためのスキルを日本人ビジネスマンの皆さんに会得してもらうことです。

なぜ、日本人に日本語のマニュアルが必要なのでしょうか。日本人は、日本語を使えます。しかし、日本語を知っているわけではありません。日本語能力も核となる部分は、暗黙知・身体能力の一種です。「使える」と「知っている」とは別です。「知って使う」のが一番です。

なぜ、今、日本語、そして、日本語マニュアルなのでしょう。日本全体をひとつの情報装置に喩えましょう。日本という情報装置を高機能化・高性能化するには、日本を構成する日本人ひとりひとりの日本語という言語装置のスキルの向上が不可欠です。そこに日本語マニュアルの役割があります。

1章 文書・文章ライティングのモデルプロセスを学ぶ

1.1 言葉の役割

私達は、色々なメディアを使い、また、それらを色々な組み合わせ、多種多様な情報の表現や伝達に使用しています。メディアには、それぞれにメディア本来の役割があります。言語にも、言語本来の役割があります。言語は、世界を切り分け、注目する部分を絞り込み、記号の体系として実在の世界も虚構の世界も思うままに表現することができます。これを、世界を分節化し、記号化するといいます。この分節化と記号化の威力によって、言語は、他のメディアが持つことの出来ない表現能力を備えることとなります。

1.2 ビジネス文書とビジネス文章

本マニュアルがライティング対象とするのは、言語という表現メディアで表現したドキュメントというコンテンツ形式です。ドキュメントは、少し堅苦しくなります



が「文書」とも呼ばれます。

ビジネス活動は、多種多様な、そして、大量の文書を作成し、交換することによって成り立っています。ビジネス活動で使われる文書をまとめてビジネス文書と呼ぶことにします。したがって、本マニュアルが中心に据えるのは、ビジネス文書における日本人ビジネスマンのための日本語ライティングです。本マニュアルの目的は、ビジネス文書の文書品質を向上させ、文書作成の効率を上げ、文書の伝達・交換を活性化させることによって、ビジネス活動そのものの品質向上、効率向上、活性化に資するようにしたいということです。

それでは、ビジネス文書とは、どのような文書なのかをみてみましょう。分野、業界、組織ごとによって異なりますが、例えばとして挙げると、以下のようになります。

(1) 顧客サービス文書

ユーザマニュアル、社外 Web、業績報告書、社外メール

(2) 業務文書

業務連絡文書、業務報告書、業務提案書、議事録、社内 Web、社内メール、社内 SNS

(3) 技術文書

開発文書、障害対応文書、マニュアル（業務、操作、運用）、成果文書（技術報告書、発明提案書、学術論文）

(4) 法的文書

開示知財文書（特許、実用新案、商標、意匠）、守秘知財文書、契約書、規約・定款、コンプライアンス関連文書

それぞれの文書、あるいは、それぞれの文書カテゴリには、それぞれ独自の目的・役割があります。文書は、それぞれの目的・役割に沿った文書構造、あるいは、書式を備えています。文書構造は、記載項目の階層構造として構成されるものです。例えば、学術論文と特許明細書の文書構造を挙げましょう（図 1.1）。



図 1.1 文書構造の例

文書の記載項目を埋めて項目の情報内容となるのが<文章>であるとなります。当然のことながら、文章には、それぞれの文書特有の、また、各記載項目特有の要件があります。一方、文章には、すべての文章、あるいは、ほとんどの文章に共通に求められる要件があります。本マニュアルの目的は、日本語文章をこの共通となる要件を満たすようにライティングできるようにすることです。あくまでも、本マニュアルは文章のライティングです。文書のライティングは置いておきます。「文書ライティングマニュアル」は、文書ごとに、それぞれの分野・業界・団体・組織・機関で整備されるものとしします。

文章にも構造があります。文章は、構成要素の階層構造によって構成されています。文書の記載項目の要件によって一文、あるいは、一語句の場合もありますが、基本の構造は、図 1.2 に示すものになります。

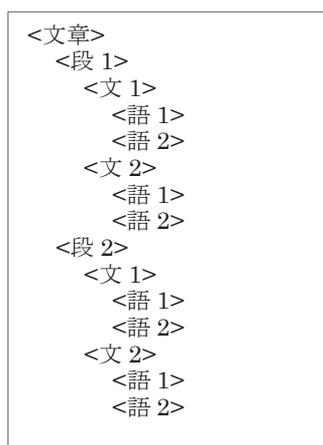


図 1.2 文章構造

1.3 文章特性がライティングを特徴付ける

文章共通となる要件を満たすように日本語文章をライティングできるようにする、それが、本マニュアルの目的です。といっても、対象とする文章が一種類だけというわけではありません。何種類かに分かれます。種類分けを決めるのが文章特性です。文章特性がライティングの仕方を特徴付けることとなります。

本マニュアルは、以下に (1)、(2)、(3) として列挙する文章特性を対象とします。ただし、この3つを均等に重視するとなると、本マニュアルのボリュームを相当に超えることとなります。そこで、(2) に重点を置き、(1) や (3) にも適用できるものを出来るだけ含

めるように心掛けることにします。

(1) 軽快さを重視する

読み手が共通に持つ知識や推論に大きく委ねることを前提にテンポ良く伝え、読むことに軽快さや快適さを感じさせるようにするという文章特性。ユーザマニュアルやユーザ向け Web ページなどの顧客サービス系文章の文章特性です。

(2) 正確さを重視する

読み手の知識や推論に依存する部分を各分野の常識的・共通的なものに極力絞り、論理的に緻密な内容を誤解が生じないように正確に表現し効率よく伝えるという文章特性。業務文書系文章、技術文書系文章、学術文書系文章の文章特性です。

(3) 厳格さを重視する

依存する読み手の知識や推論を、個別の読み手のものに左右されないように社会的・公的なものに限定し、さらに、主旨に反する読み方ができないように解釈を絞るようにし、厳格に表現し伝えるという文章特性。法的文書系文章の文章特性です。

1.4 ライティングのモデルプロセス

ライティングのモデルプロセス(図 1.3)を説明しましょう。このモデルプロセスは、文書のライティングにも文章のライティングにも対応できますので、文書・文章ライティングとして説明します。モデルプロセスというのは、ライティングのプロセス(過程、工程)をモデル化したものです。実際のライティングは、色々な事情が絡んで、実に様々なプロセスを経ることになります。個別の事情を取り去って、共通となる部分、特徴となる部分を取り出したのがモデルプロセスです。

したがって、実際のライティングがこのモデルプロセスどおりに進むわけではありません。実際には、ある部分が省略されたり、ある部分がさらに細かなプロセスに分けられたり、ある部分が繰り返されたりします。また、対象となる文書・文章の特性や想定する読み手や作成環境などによっても変わってきます。

このモデルプロセスの役割は、次の2点をライティングプロセスの中に位置付けることです。

(1) プロセスに沿って異なってくる日本語の役割

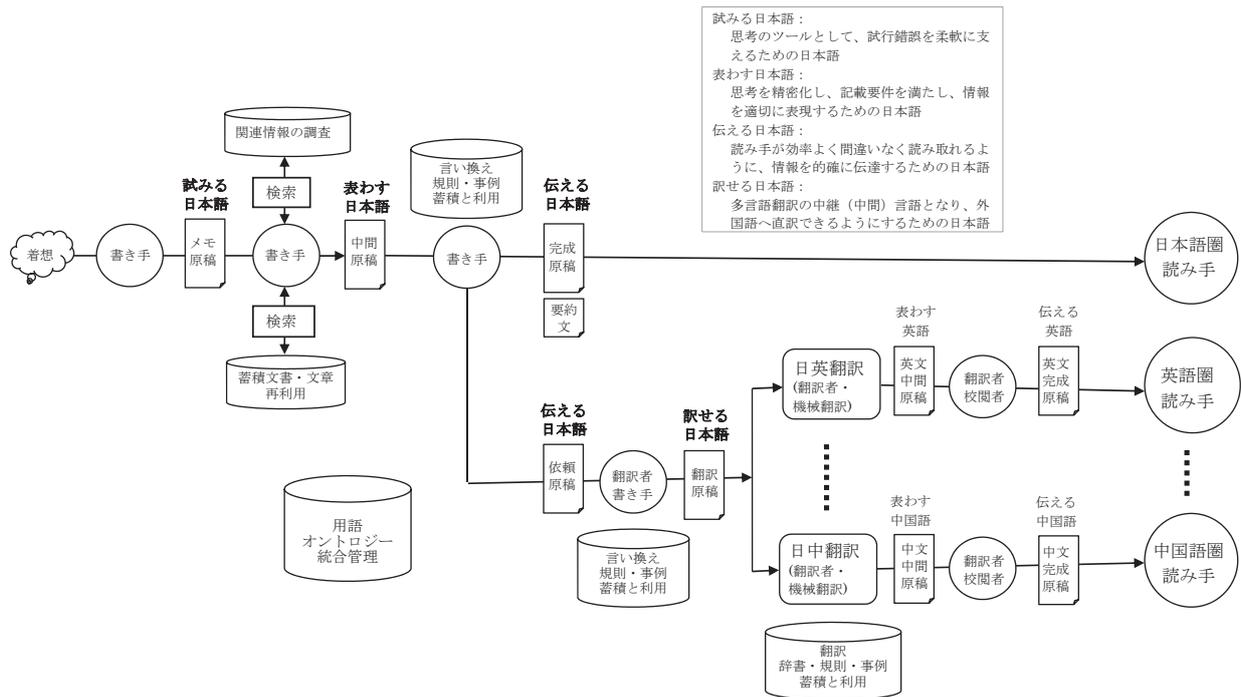


図 1.3 文書・文章ライティングのモデルプロセス

思考のツールとして、試行錯誤を柔軟に支えるための「試みる日本語」、思考を精密化し、記載要件を満たし、情報を適切に表現するための「表わす日本語」、読み手が効率よく間違いなく読み取れるように、情報を的確に伝達するための「伝える日本語」、大きく 3 つに日本語の役割を分けます。

(2) 外国語への翻訳というプロセス

これからのビジネス文書の多くは、外国語へ翻訳できるということを前提にライティングされることになるでしょう。文書・文章ライティングのプロセス設計には、効率良く翻訳するための仕組みを組み込んでおくことが必要となります。その設計には、実務に使えるほどの機能・性能をもつに至っている機械翻訳システムを利用できるようにすることも含めることになります。図 1.3 では、外国語の代表として英語と中国語を取上げてありますが、この仕組みは、他の外国語へも適用できます。そして、多言語翻訳の中継（中間）言語となり、外国語へ直訳できるようにするための「訳せる日本語」が大きな役割を担います。

1.4 マニュアルの対象範囲と利用手順

本章のまとめとして、本マニュアルが対象とする日本語表現の範囲を定めることにします。前節までで日本語

の言語機能を特徴付けるものとして以下の 3 つを説明しました。

- (1) 文章の構造に関して
文章レベル、文レベル、語・表記レベル
- (2) 文章の特性に関して
軽快さ重視、正確さ重視、厳格さ重視、情感を重視、対話性を重視
- (3) ライティングプロセスに対応付けた日本語の役割
試みる日本語、表わす日本語、伝える日本語、訳せる日本語、機械が訳せる日本語

上記 3 つを軸とする 3 次元の座標空間が日本語の機能を特徴付けることとなります。図 1.4 は、この座標空間を文章の構造に関する座標軸のレベルを別々にした 3 つの 2 次元の座標空間として表示しました。そして、本マニュアルが対象とする日本語表現部分を塗りつぶすことによって示しました。重点の置き方を塗りつぶしの色の濃淡（濃いほど重点化）に反映させてあります。

この図 1.4 を念頭に置いて、本マニュアルの利用者の皆さんは、次の手順に従って言い換え規則の適用を進めてください。

- [1] ライティング対象とする文章の文章特性を見定め

て下さい。

[2] ライティングプロセスのどの段階にあるのかを規定して下さい

[3] 文章に語・表記レベルの規則、文レベルの規則、文章レベルの規則を順に適用して下さい。必要なら、この順に繰り返し適用することを試みて下さい。

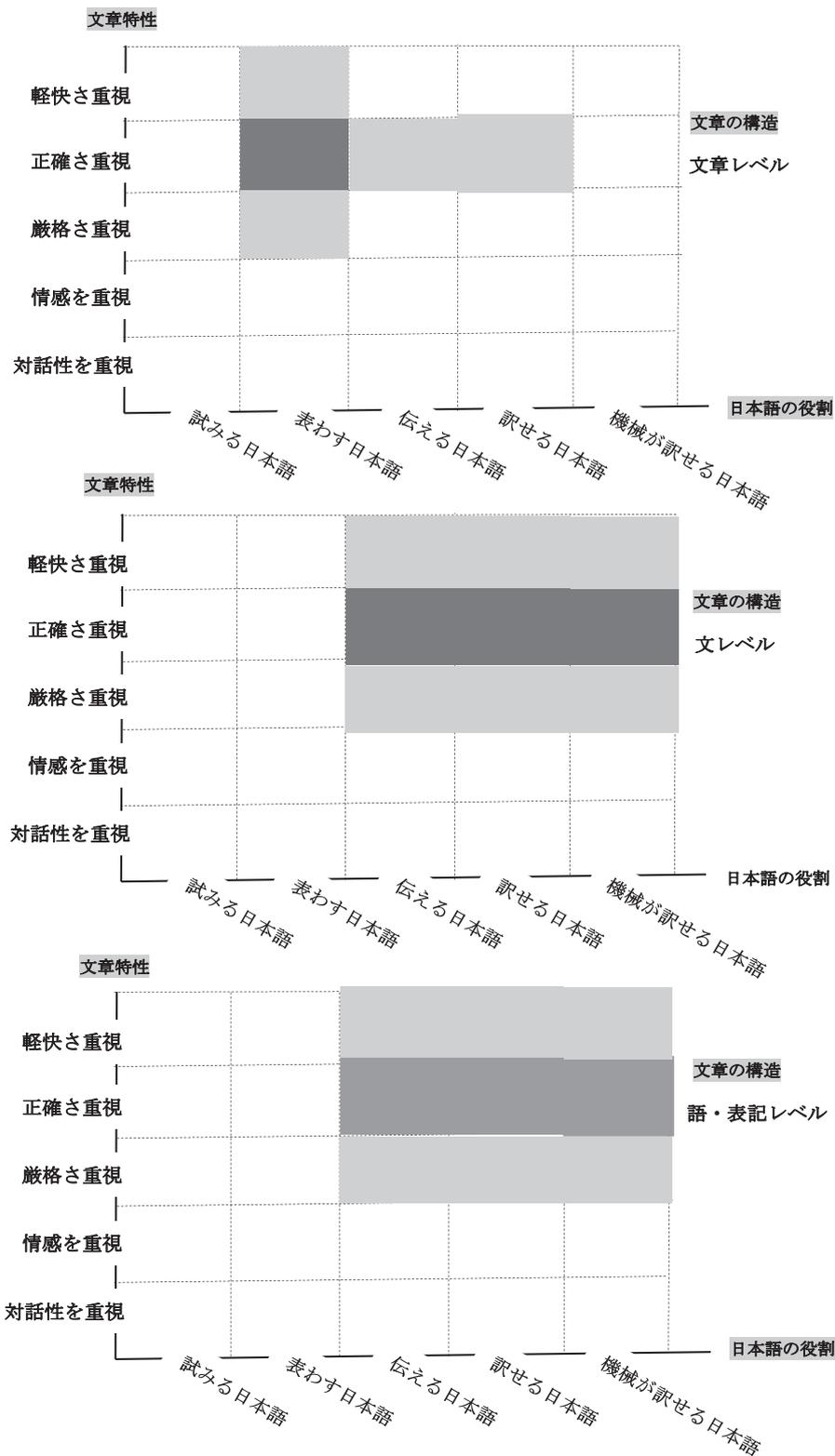


図 1.4 本マニュアルが対象とする日本語の機能